ルドルフ・シュタイナー
「サン・マルタン」について

〔目次〕

・ルドルフ・シュタイナー
『十葉の書について』
1905年4月3日、ベルリンでの講演に基づく
断片的なノート

・「未知の哲学者（ル・フィロゾフ・アンコニュ）」

・ルドルフ・シュタイナー
『ゴルゴタの秘跡の認識への礎石
― 宇宙的・人間的メタモルフォーゼ』（GA175）
第七講　ベルリン、1917年3月20日
「誤りと真理」

神秘学遊戯団

■ルドルフ・シュタイナー
「サン･マルタン」について

・ルドルフ・シュタイナー『十葉の書について』
1905年4月3日、ベルリンでの講演に基づく
断片的なノート
・「未知の哲学者（ル・フィロゾフ・アンコニュ）」

ルドルフ・シュタイナーは、
ルイ＝クロード・ド・サン＝マルタン
（Louis-Claude de Saint-Martin, 1743–1803年、
「未知の哲学者」Philosophe Inconnu）について、
特に1916〜1918年頃の講演で繰り返し言及し、
「深く切り込む意義を持つ人物」と評価。
18世紀末の古い神秘思想の最後の代表者であり、
ベーメを「第二の師」と呼んでいるように
ヤコプ・ベーメの影響を強く受け、
その後継者的存在として位置づけている。

「Beiträge」（Heft 32）でも、
サン･マルタンについてとりあげられているので、
（R. Friedenthalによる編集）
今回はまず以下をとりあげる。

・ルドルフ・シュタイナー
『十葉の書について』
1905年4月3日、ベルリンでの講演に基づく
断片的なノート
・「未知の哲学者（ル・フィロゾフ・アンコニュ）」

最も詳細に論じられているシュタイナーの講義は、
GA 175『ゴルゴタの秘跡の認識への礎石
― 宇宙的・人間的メタモルフォーゼ』第7講「誤りと真理」
（1917年3月20日のベルリン講演）で、
サン＝マルタンの主著『誤りと真理』
（Des erreurs et de la vérité, 1775年）を中心に扱っているが、
この講義については②③でとりあげる。

さて、シュタイナーは、
サン＝マルタンの思想は「健全」で「具体的」だが、
すでに概念が「影のように」なっており、
完全に生きたものではなくなっているため、
現代においてはは精神科学によって
その智慧を新しい形態で取り戻す必要があるとしている。

主な要点は以下の通り、

〔時代的位置づけ〕

サン＝マルタンは「古い時代の黄昏の光」の中で語っており、
現代（1917年時点）のように「新しい時代の黎明」からではない。
18世紀の自然科学的・神秘的概念を使いながら、
現代の精神科学が扱うような問題
（人間と宇宙の関係、道徳、物質の本質など）を示唆した。

〔概念の使用〕

サン＝マルタンは、ベーメやパラケルススと同じく
「水銀（Merkur）・硫黄（Schwefel）・塩（Salz）」という
三つの基本原理に基づいて人間と宇宙・倫理を説明し、
これらを雷雨などの自然現象にも適用し、
当時すでに芽生えていた唯物論に対抗したが、
シュタイナーはこれを現代的に翻訳。
「塩」は神経系・思考器官（頭部）、
「硫黄」はリズム系・呼吸系（胸部）、
「水銀」は代謝系（その他の身体）に対応すると示唆している。

〔知識の豊かさ〕

サン＝マルタンは
「豊かな知識の充満から語っており、彼が与えるものは
その魂に生きる知識の外的な蔓にすぎない」とし、
本の中で自身も
「これ以上深く語れば、多くの人にとって
夜の闇に隠しておくべき真理を漏らしてしまう」と
何度も示唆を加えているが、
精神科学者はその行間を読めば、
隠された高い智慧の宝庫であることがわかるとしている。

〔影響〕

サン＝マルタンなしでは
ヘルダー、ゲーテ、シラー、ドイツ・ロマン派は考えられない。
逆に彼自身もベーメなしでは考えられない。
19世紀の唯物論的衝動によってその影響は「抑圧」されたが、
未発掘の智慧の宝が大量に残っている。
ただし、1842年頃を境とする「強力な分離の壁」
（古い神智学から自由に基づく精神科学への転換）以降、
その思想形態をそのまま使うことはできないため、
新しい表現が必要であるとしている。

※以下、「Beiträge」（Heft 32）より。

●編集者による前書き

このノートは、いわゆる「未知の哲学者」として知られるサン＝マルタンが、その著作『誤りと真理、あるいは人間をあらゆる認識の普遍的原理へと連れ戻すこと』（マティアス・クラウディウスによる最初のドイツ語訳、ブレスラウ、1782年刊）の中で展開した「十葉の書」の解説に関連して、ルドルフ・シュタイナーが行った講演から採られたものであることは明白です。

シュタイナーは長年にわたり、サン＝マルタンを「失われた精神性」の代表者として繰り返し指摘し、その精神性は現代において精神科学（人智学）によって新たに獲得されねばならないと説きました。シュタイナーの勧めで、1925年にシュトゥットガルトの「デル・コメンデ・タ－ク（来たるべき日）出版社」から新装版が出版され、シュタイナー自身がその序文を執筆する予定でしたが、彼の急逝により実現しませんでした。なお、テキスト中の点（……）は、このノートの執筆者（記録者）によるものです。

●ルドルフ・シュタイナー
『十葉の書（十枚の葉を持つ書）について』

第一の葉（第1ページ）

人は内面において「生成（誕生）」と「消滅（死）」を体験します。たとえば、一本の花を眺めるときを思い描いてください。花は生まれ、そして枯れていきます。花は一つの「種（果実）」を残しますが、その種もまた朽ちていきます。しかし、ごく小さな、目に見えないほどの「生命の萌芽」だけがそこに残ります。次に生まれる新しい植物のすべてが、この中にすでに含まれているのです。

植物は、「大きく空間へと広がっていく状態（拡大）」と、「まるで無（点）へと凝縮されたかのような本質的な状態（収縮）」との間を交互に行き来しています。この「広がり（拡大）」と「一点への凝縮」のプロセスは、自然界のあらゆる場所で観察することができます。これは人間においても同様であり、太陽系全体（宇宙全体）においても全く同じです。

東洋の神秘学において、私たちはこれをマンヴァンタラ（宇宙の顕現期・宇宙の昼・拡大）、そしてプララヤ（宇宙の消滅期・宇宙の夜・点への収縮）と呼びます。

あらゆる豊かな生命が凝縮され、そこから再び生命が湧き出してくるような、この「一点へと凝縮された状態」を、人はみずからの内面においてリアルに体験しなければなりません。秘教の修練者は、この「点」をじっと凝縮して見つめる内的な意識状態へとみずらを移行させる必要があります。

彼は、すべてのものを含み、すべてのものがそこから湧き出し、それ自体は「無」でありながら同時に「一切」であるような「一点」を、内面で体験しなければなりません。その一点には、存在（Sein）と諸力（Kräften）の「一なる統合」が含まれています。「無」からいかにして「全宇宙」が湧き出てくるかを実体験できるような意識状態へとみずからの参入を進めること――これこそが秘儀の一つなのです。

これが、「第一の葉を読み解く」ということの真の意味です。

第二の葉（第2ページ）

全世界における「二面性（二元性）」を内面で体験すること。私たちは至る所で二面性を見出します。男と女、光と影、ポジティブとネガティブ、善と悪。二面性は、あらゆる「生成（進化）」の本質に深く根ざし

ています。秘教の修練者は、まず自分自身の人生において、この二面性がどのように至る所で作用しているかを完全に自覚し、明確に把握しなければなりません。

彼は、これらの二面性において思考することを徹底的に学ばねばなりません。決して片方だけを考えるのではなく、常に両方を同時に考えなければならないのです。たとえば、自分自身と神性との関係について考えるとき、次のように考えるべきです。「私の内には神なる我（一なる自己）が生きている ―― そして、私は神なる我の内に生きている」「私は感覚的な（肉体を持つ）存在であるが、やがて霊的な存在になるだろう」「私はかつて霊的な存在であったが、感覚的な存在にならねばならなかった」。このように、常にこうした二面性において思考することを、内なる義務として自らに課さねばなりません。そのように二元性において思考することを学ぶとき、初めて正しい思考ができるようになります。

第三の葉（第3ページ）

至る所に含まれている「三面性（三位一体）」を思索すること。人間は「身体・魂・霊」の三つの構成要素から成っています。また、キリスト教では「父と子と精霊」です。かつて人々が神秘劇の神殿（秘儀の場）で統治する神性として崇拝したものも、たとえば「オシリス、イシス、ホルス」のように三つの構成要素から成っていました。

ここには重要な秘密（秘儀）が隠されています。「二面性（二元性）」を「三面性（三元性）」へと昇華させて捉えることに習熟する者は、多くのことを見通すことができるようになります。世界をその三面性において思考するということ、それは世界を「知恵」をもって思考することを意味するのです。

第四の葉（第4ページ）

これは「四面性（四元性）」としての人間です。すなわち「肉体・魂・霊」、そして「自己意識（自我）」です。人間の最も低い自然（肉体的な本性）は、その内側から高次の自然（霊的な本性）を発達させていきます。これが、三面性から発展して生じる「四面性の秘密」に含まれている内容です。

この四面性は、あらゆる存在において見出すことができます。包括的な視野（霊視）から見れば、すべての存在は平等（同じ構造）です。人間は、この「物理的な場（地上界）」において四面性として生きています。しかし、ライオン（動物）は地上界において四面性としては生きていません。地上では、ライオンは「肉体、エーテル体（生命体）、アストラル体（感情体）」という三面性しか持っておらず、彼の四番目の要素である「自我（類魂）」は、霊的な世界（霊界）に生きているのです。

〔人間〕	〔ライオン（動物）〕
4 メンタル（自我）	4 自我（霊的世界に存在）
3 アストラル（感情体）	3 アストラル（感情体）
2 エーテル（生命体）	2 エーテル（生命体）
1 物理的（肉体）	1 物理的（肉体）

植物や鉱物もまた、それぞれの四面性を持っています。植物は、地上界においては肉体とエーテル体だけで存在しています。植物や鉱物は、その四面性の残りの部分（高次の要素）を霊的世界に持っているのです。しかし、人間、動物、植物、鉱物は、いずれも形を変えて四面性を備えています。神秘学の修練者が「第四の葉」を読み解こうとするならば、これらの関係を常に内面で同時に体験しなければなりません。

第五の葉（第5ページ）

この葉を読み解くとき、人間がみずからの内側から（外の世界へと）投影しているすべてのものが明らかになります。すなわち「偶像崇拝（Idolatrie）」の秘密です。人間は、超感覚的な（霊的な）ものと感覚的な

（物質的な）ものとを結びつける性質を持っています。人間とは、思考し、表象（イメージ）を形成する存在なのです。神話や伝説の世界は、このことを多様な方法で表現しています。

あらゆる民族の神話や伝説の間には、神秘的な結びつきが存在します。たとえば「馬の神話」は、この第五の葉に含まれる内容と深い関係があります。馬という動物は、ある特定の進化の段階で敢えてあとに留まった（退化した）存在を表しています。のちに「智恵（ Klugheit＝知性・賢さ）」となるための原型（素質）は、かつて「ハイパーボリア（超北極）根層（アトランティス以前の超太古の進化段階）」において人類に初めて与えられました。

およそあらゆる高次への進化の背後には、「何かをあとに留め置く（犠牲にする）ことによって、自らは上方へと進化していく」という原理が隠されています。当時、人間が智恵の原型を発達させることができたのは、人間の自然（本性）が、みずからの内から「馬の本性」に該当する部分を外部へと排出し、突き放したからこそ可能だったのです。

第六の葉（第6ページ）

ここには、人間が超感覚的なものとして認識し、そこに向かって憧れ、努力していく対象についての秘密が含まれています。人類の「理想」がこの第六の葉に記されており、たとえば「自由・平等・友愛（ブラザーフッド）」といった理想がそれにあたります。いまだ地上に存在しておらず、人間がこれから自ら勝ち取っていかねばならないものと、人間の本性とを結びつけるプロセスが、この第六の葉に示されています。人間は、人類の「未来のあり方」へと目を向けること、すなわち現在の中に「未来の種（ keime）」を見出すことを学ぶのです。

第七の葉（第7ページ）

ここで修練者は「7という数の秘密（七元性）」を理解するようになります。彼は次のように学びます。「私は（現在の）三面性（身体・魂・霊）から成っており、そこからさらに高次の三面性（霊我・生命霊・霊人）が生まれ出なければならない。これがすなわち『六面性（6）』である。彼は現在の三面性から出発して、より高次の三面性（六面性）へと帰還する。そして、彼自身（その中心にいる自我）が『7番目の要素』なのである」。

第八の葉
（ノートの執筆者による省略：……）

第九の葉
（ノートの執筆者による省略：……）

第十の葉
（ノートの執筆者による省略：……）

現在、人間は物理的な場（地上界）において、もし同時に「スピリチュアルな生命」を発達させないならば、到底耐え忍ぶことのできないような、ある重大な段階へと急ぎ足で向かっています。

人間は、そう遠くない将来、物質的な場において恐るべき破壊力を発揮させるような「諸力」の支配者となるでしょう。たとえば、遠く離れた場所で、誰がその首謀者であるかを誰一人として突き止められないまま、大爆発や大爆破を引き起こすことができるようになるのです。

その時、もし人間が道徳的な高みに達しておらず、これらの恐るべき力を「ただひたすら、純粋に善き目的のためだけ」に用いることができないならば、人類には破滅（悲劇）が訪れるでしょう。

人類の導き手である「マイスター（大師）たち」は、この未来の時代をすでに予見していました。そして、神智学（人智学）の教えが持つ使命とは、これから来るべきものに対して人間の心（魂）をあらかじめ準備させ、人々に警告を発し、進むべき「道」と「目標」を示すことにあるのです。

●ルイ・クロード・ド・サン＝マルタン
『十葉の書』より（マティアス・クラウディウス訳）

……これらの言葉に尽くせぬ恩恵は、人間が誕生と共に授かった贈り物の一つである、この上なく貴重な一冊の「書」を所有し、それを理解することと結びついていました。この書はわずか10枚の葉（ページ）から成るものでしたが、そこには「かつてあったもの（過去）」「いまあるもの（現在）」「これからあらんとするもの（未来）」に関するすべての洞察と、すべての認識が包含されていたのです。そして当時の人間の能力は非常に広大であったため、彼はこの書の10枚の葉すべてを同時に読み解き、一瞥するだけでその全体を把握することができました。

しかし、人間が「堕落（原罪による転落）」したとき、書そのものは彼の手元に残されたものの、かつてのように容易に読み解く能力は奪われてしまいました。今や人間は、その葉を一枚また一枚と、順を追ってしか知ることができなくなったのです。それにもかかわらず、人間がこの10枚の葉のすべてを学び尽くすまでは、かつての霊的な権利が完全に回復されることは決してありません。なぜなら、これら10枚の葉のそれぞれが固有の、彼に固有の知識を含んでいるとはいえ、それらは互いに深く結びついているため、すべての葉を知るに至らなければ、そのうちの一枚すら完全に体得することは不可能だからです。また、人間は一枚ずつしか読めなくなったと言いましたが、もし彼がそのすべてを最初から最後まで遍歴していなければ、そして何よりも、他のすべての葉の「統合点」として機能している「第四の葉」を通過していなければ、彼の歩みのいかなる一歩にも確実性が欠けることになるでしょう。

これは人間がほとんど注意を払ってこなかった真理ですが、人間にとってこれを心に留め、認識することは無限に必要なことです。なぜなら、人間は誰もがこの書を手に携えて生まれてくるからです。そして、この書を研究し理解することこそが、まさに人間が果たすべき使命であるとするならば、そこで過ちを犯さないことがどれほど彼らにとって重要であるかは、容易に判断がつくはずです。

しかし、人間はこの点に関する怠慢を極限にまで推し進めてしまいました。人間たちの間には、この10枚の葉が持つ、あらゆる意味で切り離すことのできない「本質的な結びつき」に気づいた者はほとんど見当たりません。ある者はこの書の半分（第五の葉）で立ち止まり、ある者は第三の葉で、またある者は第一の葉で立ち止まってしまいました。そこから、無神論者、唯物論者、そして理神論者が生み出されたのです。また、ある者たちはその結びつきを本能的に察知しはしたものの、それぞれの葉の間に立てられるべき重要な違いを把握できず、それらを単なる一冊の書の葉として、すべてが等しく、同一の性質を持つものとみなしてしまったのです。

その結果、一体どのようなことが起こったのでしょうか。それは次のようなことです。すなわち、この書のある一箇所だけに留まり、そこから先へ進む勇気を持てなかった人々は、まさにその場所に固執しながらも、自分たちはただ書（真理）に従って語っているのだと主張し、自分自身がすべてを理解していると思い込んでしまったのです。そして、まさにその思い込みに惑わされ、自らの教えを絶対確実（不謬）であると信じ込んだ彼らは、それを世間に信じ込ませようとあらゆる手を尽くしました。しかし、他から栄養を与えられないまま孤立してしまったこれらの真理は、彼らの手の中でまたたく間に萎れてしまいました。その結果、これらの分からず屋の人間たちの手元には、知識という名の空虚な幽霊しか残りませんでした。彼らはペテンの手を借りない限り、それを確固たる実体や真の存在として通用させることはできなくなってしまったのです。

これこそが、私たちがこの論文の続きで調査しなければならないあらゆる「誤り」の真の源泉です。また、二つの対立する原理（極性）について、身体的（物質的）な存在の性質と法則について、人間の多様な能力について、そして人間の宗教とその礼拝の原理や起源について、私たちがすでに提起してきたあらゆる誤りの源泉でもあるのです。

この書のどの部分において、主にこのような過ち（脱線）が生じてしまったのかは、この先で明らかになるでしょう。しかし、その話に進む前に、まずはこの比類なき書について抱くべきイメージ（全体像）を完成させたいと思います。その目的のために、この書のそれぞれの葉（ページ）がその内に含んでいた、様々な科学（知恵）と様々な属性の知識について、ここに詳しく提示することにいたします。

第一の葉（第1ページ）が扱っていたもの
普遍的な原理、あるいは、あらゆる中心（源泉）が絶え間なく流れ出していくその「中心点」について。

第二の葉（第2ページ）
宇宙が生じる直接の原因について。宇宙を存続させている「二重の身体的（物質的）法則」について。時間の中で作用する「二重の理性的（精神的）法則」について。人間の「二重の性質（二面性）」について。そしておよそ、二つの作用によって構成され、形成されているすべてのものについて。

第三の葉（第3ページ）
身体（物質）の基盤（基礎）について。あらゆる種類のあらゆる結果（帰結）と生産物（創造物）について。そしてここには、思考することのない「非物質的な存在たちの数（本質）」が見出されます。

第四の葉（第4ページ）
能動的（活動的）に作用するすべてのものについて。時間的な言語（地上の言葉）と、時間を超えた言語（霊的な言葉）のあらゆる原理について。人間の宗教と礼拝について。そしてここには、思考する能力を持つ「非物質的な存在たちの数（自我をもつ存在）」が見出されます。

第五の葉（第5ページ）
偶像崇拝（阿修羅的な歪み）と、腐敗（堕落）について。

第六の葉（第6ページ）
時間的な世界（現象界）の形成法則について。そして、半径による円の自然な分割について。

第七の葉（第7ページ）
風の発生原因、ならびに潮の干満（潮汐）について。人間の地理学的な尺度（基準）について。人間の真の認識について。そして、人間の理性的あるいは感覚的な生産物の源泉について。

第八の葉（第8ページ）
人間の唯一の支えであり、唯一の力であり、唯一の希望である「あの御方」の、時間的な数について。すなわち、能動的（活動的）であると同時に理性的であり、その作用を「四つの世界」へと広げている、二つの名前と四つの数を持つ「リアルで物理的な存在」について。また、正義（司法）と、すべての立法権力（これには君主の権利、将軍や裁判官の権威が含まれます）についても扱っていました。

第九の葉（第9ページ）
女性の胎内における「身体的人間」の形成（肉体組織の構築）について。そして、普遍的および個別的な「三角形」の解体について。

そして、ついに第十の葉（第10ページ）は、これに先立つ9つのすべての葉の道筋であり、それらを補完し完成させるもの（補完物）でした。これこそが間違いなく最も本質的なページであり、本来、この葉がなけ

ればこれまでに挙げたすべての葉を知ることは叶わなかったはずです。なぜなら、これら10の葉をその数の順に従って円周上に配置したとき、この第十の葉と、すべてのものがそこから流れ出していく「第一の葉」との間に、最も深い親和性（結びつき）が見出されるからです。この第十の葉の重要性を推し量りたいのであれば、万物の創造主がまさにこの第十の葉によって「何者にも打ち勝ちがたい存在」となっていることを知るべきです。なぜなら、この葉は創造主の周囲を強固に取り囲む「 移動式馬車砦（絶対の防壁）」であり、いかなる存在もこれを越えることはできないからです。

したがって、人間が追い求めることのできるすべての知識と、人間に課せられた法則がこの一覧（十葉の書）に網羅されている以上、人間がこの源泉に分け入って汲み出そうとしない限り、いかなる認識を得ることも、自らの真の義務を果たすことも決してできないのは明らかです。また、私たちは今や、人間をそこへ導かねばならない「導き手」が何であるかも知っています。人間は、たとえ自分自身の力だけではこの実り豊かな源泉に向かって一歩も進むことができないとしても、自らの意志を忘れ、ただひたすらに自分のために作用してくれるはずの「能動的かつ理性的である原初への原因（宇宙根源の意志）」にその作用を委ねるならば、確実にそこへ到達できると確信してよいのです。

それゆえに、人間がこの悲惨な境遇（地上への堕落）の中にあっても、なおこれほどの手がかりを見出すことができるという幸運を、私たちは共に祝いましょう。人間が、いまだこの尊い書を通じて、何一つ誤ることなく次の事柄を発見できると知るとき、その心は再び希望を抱き、勇気を得るはずです。すなわち、諸存在の性質や属性、万物の原因、自らの宗教の確実で不変の法則、そして原初の存在（神）に対して必ず捧げねばならない礼拝の法則です。これはつまり、人間は理性的（精神的）であると同時に感覚的（物質的）な存在であり、この世界のすべては必ずそのどちらか一方（あるいは両方）に属している以上、人間は「自分自身と、存在するすべてのものとの相互関係」を見通さねばならない、ということに他なりません。

なぜなら、この書がわずか10の葉しか持たず、それでいてすべてを内包しているとするならば、いかなるものも、その性質によってこれら10の葉のいずれか一つに属さずには存在し得ないからです。そして、自らがどの階層に属し、10の葉のどれに該当するかを、自ら示し証明していない存在はただの一つもありません。したがって、あらゆる存在は、それ自身に関するすべての事柄を私たちに教えてくれる手段を、すでに私たちの手元に提供してくれているのです。しかし、これらの知識において正しい道を歩み続けるためには、諸存在の性質を形作っている「真実で素朴な宇宙の法則」と、人間が日々作り上げては無理やりこじつけている「偽りの法則」とを、明確に見分ける方法を知らねばならないのです……。

●「未知の哲学者（ル・フィロゾフ・アンコニュ）」

ルドルフ・シュタイナーは、19世紀の精神的発展に寄与した人物たちの中で、フランスの哲学者であり神智学者でもあるルイ・クロード・マルキ（侯爵）・ド・サン＝マルタンに対して「深く決定的な重要性」を認めています。

当初、この若き侯爵の人生は、その家柄によって予め定められた軌道を歩むかのように見えました。1743年1月18日、歴史的な城で有名なロワール川沿いの小さな街アンボワーズに生まれたこの極めて才能豊かな青年は、野心的な父親によって法学者になるよう運命づけられ、国内最高峰の教育機関で学びました。しかし、法学そのものや当時の司法界の悲惨な状況に対する嫌悪感があまりにも強かったため、弁護士として短期間活動した後、軍隊に士官として入隊する道を選びました。青年期からすでにオカルト（秘教）の著作に親しんでいた彼は、所属連隊の駐屯地であったボルドーにおいて、フリーメーソンの結社と接触することになります。

当時、イングランドを発祥とするフリーメーソンは、フランス国内で強力な全盛期を迎えていました。600を超えるフランスのロッジ（支部）のうち、軍隊内だけでも70近くが存在していました。内部の紛争期を経て、「自由と平等」の原理が定着しており、それはロッジの憲章だけでなく、構成メンバーの多様さにも表

現されていました。また、一般の社会生活においても、フリーメーソンはその存在感を示すことがありました。たとえば、ヴォルテールの友人であるエラ・ド・ボーモンとそのロッジの兄弟であるデュパティは、司法界における特に凄惨な非人道的行為をいくつか阻止することに成功しています。もちろん、ペテン師や日和見主義者たちもフリーメーソンへの立ち入りを画策し、すべてのロッジが同じ精神的高みにあったわけではありません。しかし全体としては、宮廷や最高権力層において不道徳と専横が横行していた時代にあって、正義と真理の原則を浸透させようという志向が主流を占めていたのです。

サン＝マルタンの発展に決定的な影響を与えたのは、カバラの神秘主義者であるマルティネス・パスカルス（パスコアリー）との出会いでした。ポルトガル生まれのパスカルスは「高位階システム」を創設し、これはフランス、特にはロシアやドイツへと普及していきました。通常のロッジの厳格な原則とは異なり、女性の入会も認められていたこのシステムの所属員たちは「マルティネジスト（Martinezisten）」または「マルティニスト（Martinisten）」と呼ばれました。したがって、後者の「マルティニスト」という名称は、本来はサン＝マルタン（Saint-Martin）とは何の関係もなかったのですが、のちに彼の支持者たちのことを指す言葉へと転用されることになります。

最初、サン＝マルタンはドン・マルティネス（パスカルス）の弟子となり、彼からカバラの秘教の教えを授かりました。そこで授かった知恵にすっかり満たされた彼は、精神的な活動にのびのびと身を捧げるために軍の士官を辞職しました。彼は数の神秘主義（数秘術）に没頭し、高名な天文学者ジョセフ・ジェローム・ド・ラランドと共に数学的研究に励み、一時期はカリオストロとも親しい関係にありました。

しかし、長くなるにつれて、彼はロッジの運営にまとわりつく弱点を見逃さなくなりました。彼はフリーメーソンの儀式主義（セレモニアル）の外面化（形骸化）を見抜き、ロッジの兄弟たちの大部分が単なる「形式だけの参入者（Inities par la forme）」にすぎないことに気づいたのです。その一方で、パスカルスが自身のシステムに取り入れていたカトリック的要素にも不満を抱くようになりました。たとえば、第6位階への参入の際には、カトリック信仰への忠誠の誓いを立てる必要があったのです。ちなみに、このようなことは当時としては珍しいことではありませんでした。ローマ教皇によるあらゆる破門の宣告にもかかわらず、多くの聖職者は、フリーメーソンの活動の中にカトリックの教義に反するものは何もないと考えていたのです。

いずれにせよ、サン＝マルタンは間もなく独自のフリーメーソン・システムである「修正スコットランド儀礼（Rite rectifié）」の創設へと乗り出しました。1778年にこのシステムがフランスの「厳格戒律派（Strikte Observanz）」の支部と合併してからしばらくして、このシステムは消滅しました。しかし、それよりも前にサン＝マルタンはすでにフリーメーソンから決別していました。彼は、自らの神智学的な認識を深め、それを広めるためには、いかなる組織の形式からも自由であることが最善であるという確信に至ったのです。

ルドルフ・シュタイナーが、サン＝マルタンの弟子たちや志を同じくする友人たちのサークルについて語る様子から 、その中には精神的に極めて重要な人物たちが含まれていたことが推察されます。その一人に、エカチェリーナ2世の統治下でロシアのロッジ運動を主導したガルィーツィン公爵がいました。彼は、自分はサン＝マルタンと交流することによって初めて一人の「人間」になることができた、と率直に公言していたのです。

1775年、リヨンにおいて、サン＝マルタンの処女作『誤りと真理』が出版されました。この匿名にちなんで、サン＝マルタンは広く「未知の哲学者（フィロゾフ・アンコニュ）」と呼ばれるようになります。この本は出版直後から、特にドイツとフランスのフリーメーソン・ロッジの間で大きな評判を呼びました。マティアス・クラウディウスによるドイツ語訳は1782年にブレスラウで出版されています。この詩人（クラウディウス）は、その序文の中で『誤りと真理』を「格別な書」であり、学者たちもこれをどう評価すべきか途方に暮れていると述べています。クラウディウス自身も「私にもこの本は理解できない」と告白しながらも、次の

ように付け加えています。「しかし、そこから受ける卓越性と確実性の印象は別として、私はその中に純粋な意志、並外れた優しさと高潔な志、そして内なる静けさと心地よさを見出すのである」

この本がクラウディウスをはじめとする多くの人々に強い影響を与えた理由は、ここでイメージ豊かに描写されているものが「霊的な現実」だからです。先述の、残念ながら断片（ノート）としてしか残されていないルドルフ・シュタイナーの講演は、まさにこれらの現実に言及しています。サン＝マルタンとその著作に関する本質的な解説は、特に1916年から1918年にかけてドルナハおよびベルリンで行われたシュタイナーの講演に見出すことができます。

シュタイナーは1917年1月30日の講演の中で、サン＝マルタンの極めて決定的な洞察として、「人間は、ただ自ら望むのであれば、高次の階層（ヒエラルキア）に属する霊的な存在たちと本当に結びつきを持つことができる」という認識を強調しています。サン＝マルタンは物質に何ら現実性を認めません。物質とは、原子の世界に由来するものではなく、霊的な存在たちの働きに由来するものだからです。またシュタイナーは、本来さまざまな言語の根底に存在しており、ヘブライ語が今なお最もそれに近い位置にあるとされる「普遍言語」へのサン＝マルタンの言及を、「途方もなく健全な概念」と呼んでいます。さらにシュタイナーは1917年3月20日の講演で次のように語っています。「サン＝マルタンは、豊かな知識の溢れるばかりの源泉から語っている。彼が提示しているものは、彼の魂の中に生きているこの知識の、外側に現れたほんの蔓にすぎない。彼自身も、著作のなかでそのことを何度も示唆を加えている」。シュタイナーは続けて次のように述べます。「霊学研究者には、なぜ特定の箇所にそのような注記が現れるのかが分かっている」。「特定の事柄について公に語ることが可能になるのは、精神科学（人智学）によって与えられた衝動が、人々の『道徳的衝動（ sittliche Impulse）』となった時である」と、シュタイナーはこの文脈において自らの研究について言及しています。

これらの「示唆の箇所」の一つに、サン＝マルタンによる「原初の不倫（ursprünglichen Ehebruch）」に関する記述があります（『誤りと真理』第2巻、56ページ以降）。人間が「元素の法則に服従させられる」よりも前に、この過ちを犯したというのです。サン＝マルタンの記述にはこうあります。「皆さんがそこに到達することをどれほど私が望んでいるとしても、私に課せられた義務は、この点について微々たる説明を施すことさえ私に禁じている。それに、私自身の魂の救いのためにも、私は人間の過ちについて語るよりは、むしろそれを恥じて赤面していたいのだ」。これに対してシュタイナーは、聖書の創世記第6章2節の次の箇所を指示しています。「神の息子たちは、人の娘たちが美しいのを見て、彼女たちを妻に娶った」。シュタイナーの言葉によれば、これは「それによって、のちのアトランティス世界におけるすべての混乱が引き起こされることになった出来事であり、人間がみずからのエレメンタルな（自然霊的な）本性を肉欲化させてしまったことと、神秘的なつながりを持つ出来事」を意味しているのです。

人類が今日必要としている「社会の刷新」は、サン＝マルタンによれば、地球と人間の進化における霊的な出発点、すなわち「人間が霊的な高みから堕落したこと」へと立ち返ることによってのみ可能となります。今日あるがままの自然への復帰を説いたルソーとは異なり、サン＝マルタンが要求したのは、人間が「本来の霊的本性」へと復帰することでした。彼が未来の社会構造の理想像として思い描いていたのは、メルキゼデクのような王権による「神権政治」でした。先述の1917年3月20日の講演において、シュタイナーは、このような政治的・社会的アイデアがフランス革命の15年も前に公表されていたという事実に強いスポットを当てています。

サン＝マルタンの第二の著作として、1782年に『神、人間、そして宇宙の間に存在する関係の自然な絵（絵画）』が出版され、A・W・ゼーリンによって『神、人間、および世界における自然な関係について』というタイトルのドイツ語訳が刊行されました。テキストの巻頭に付されたサン＝マルタンの伝記によると、この本は、侯爵（サン＝マルタン）の何人かの高位の友人たちの勧めによって誕生したとされています。彼らは侯爵に対し、『誤りと真理』の内容をより分かりやすく平易に表現し直してほしいと懇願したのです。

それ以降の時期、サン＝マルタンはドイツ、イングランド、イタリア、そしてスイスへの広範な旅に出ました。1788年から1791年にかけてはストラスブールに滞在しています。ここで彼は、親交のあったシャルロッテ・フォン・ベクリンの勧めにより、ヤコブ・ベーメの著作をフランス語に翻訳するためにドイツ語を学びました。サン＝マルタンが「第二の師（マイスター）」と呼んだヤコブ・ベーメとのこの密接な関係について、シュタイナーは1913年4月4日の公開講演などで言及しているほか、1917年12月25日の講演でも、サン＝マルタンは「ある意味においてヤコブ・ベーメの正統な後継者であった」と述べています。このストラスブール滞在中に、著作『欲望の人間』が執筆され、1790年にリヨンで、1812年にはワグナー訳でライプツィヒにおいて出版されました。この書は、人間がその本来の故郷である「霊的・神的な世界」に対して抱く切ない憧れに捧げられたものなのです。

貴族であったため、サン＝マルタンはフランス革命によって極限の危険に晒されました。激変する地上の事実に適応しようと努め、一時期は一兵卒として国民衛兵に服役することさえありました。最終的にはパリから追放され、生まれ故郷のアンボワーズで司書として働きましたが、恐怖政治が終焉を迎えたことで、ようやくパリへの帰還を果たしました。のちに彼は、シャティヨン近郊のオーネへと拠点を移しています。

1775年には『ある友人への手紙、あるいはフランス革命に関する政治的、哲学的、宗教的考察』が出版され、これをファルンハーゲン・フォン・エンゼが翻訳して、自身の『回想録と雑録』第6巻（ライプツィヒ、1842年刊）に収録しました。サン＝マルタンはこの著作の中で、巨大な社会的危機を克服するための前提条件として、人類をその「原初の高次の状態」へと回復させることを再び挙げています。彼は、ルソーの「一般意志」の理論にも、エルヴェシウスの「社会の成立は純粋に物質的な欲望に由来する」という主張にも真っ向から反対しました。これについて彼は、「本当のところ、大衆には意志などなく、あるのはただ盲目的な感情だけであり、彼らはその情熱を利用して、他者を自分たちの目的のために悪用しているにすぎない」と看破しています。諸民族がみずからを刷新するためには、まず何よりも「科学（学問）の改善」が必要であるというのです。

サン＝マルタンの最後の著作『事物の精神について』（全2巻、リヨン、1800年刊）は、ゴットヒルフ・ハインリヒ・フォン・シューベルトによるドイツ語訳『事物の精神と本質について』（ライプツィヒ、1812年刊）として出版されました。なお、サン＝マルタンのすべての著作に対する詳細な注釈・解説は、フランツ・フォン・バーダーによって執筆されています。

1803年10月13日、サン＝マルタンは意識が完全にクリアな状態のまま、死の苦しみ（臨終の悶え）を味わうことなく息を引き取りました[1]。周囲が彼に無理やり押し付けようとした聖職者による看取り（臨終の秘跡）を、彼は次のような言葉を遺して毅然と拒絶しました。

「私はすでに、ある高次の階層（ヒエラルキア）の位階に組み込まれており、そこから見れば、地上の教会などほんの一構成要素にすぎないのだ」

たびたび引用している1917年3月20日の講演の中で、ルドルフ・シュタイナーはサン＝マルタンについて、「彼は目に見えない霊的な学校をその背後に卒業していた」と語り、彼がいなければ「ヘルダー、ゲーテ、シラー、そしてドイツ・ロマン派などは到底考えられない」とまで述べています。それと同時に、サン＝マルタン自身も「ヤコブ・ベーメなしには考えられない」存在でした。サン＝マルタンがドイツ・ロマン派に与えた直接的な影響は、歴史的にも容易に認められます。

しかし、シュタイナーのこの発言は、より深い意味において理解されるべきです。なぜなら、たとえばゲーテ自身はサン＝マルタンの『誤りと真理』を知っていましたが、それに対しては明確に反対の立場を表明していたからです。ここでシュタイナーが視野に入れているのは、間違いなく次の事実です。すなわち、サン＝マルタンが「啓蒙主義」や「感覚論（唯物論）」が全盛を極めていた近代の黎明期にあって、敢えて「古代の秘儀の知恵」へと再び民衆を連れ戻し、それによって当時の精神的な大気に揺らぎを与えたということで

す。この揺らぎこそが、のちに新しいスピリチュアルな衝動（ゲーテたちの精神性）を開花させる土壌となったのです。

この事実への裏付けは、シュタイナーの論文『ゲーテの精神的環境と現代』の中に見出すことができます。この論文によると、18世紀後半には、道徳的な衝動（善悪の心）を思考から完全に排除してしまう「近代自然科学」の台頭に対抗して、「人間の認識を、再び宇宙の『道徳的世界秩序』と結びつけたい」という強い魂の欲求が湧き起こっていました。サン＝マルタンは、人間がその真の本質から転落したという「超太古の重大な原罪（人類の堕落）」を語ることで、この魂の欲求に応えたのです。

これに対してゲーテは、次のような全く異なるアプローチをとったとシュタイナーは記しています。

「ゲーテは、自然現象を徹底的に観察することを通じて、そこから霊的なものが自ずと開示されるとき初めて、精神（霊）の霊視へと到達することができた。彼（ゲーテ）にとって、人間とは原初の高次の本質から『転落した存在』ではなく、その高次の本質をすでに自分の内側に抱えている存在なのである。ただ、最初は人間自身にとってそれ（内なる神性）が知覚できない状態にあるにすぎない……。ゲーテにとって、自然を観察すること（自然観）は、人間が堕落したことの結果ではなく、むしろ自分自身の本来の姿へと上昇していくための強固な土台なのである。このようにしてゲーテは、魂の本当の『自由』という理念を、彼自身の世界秩序の中に組み込んだのである。」

これらの解説と、1917年3月20日の講演の内容は、思想の統合として眺めることができます。ドイツの精神生活におけるサン＝マルタンの重要性を指摘したあと、シュタイナーは次のように語っています。サン＝マルタンの著作の中には、「いまだ発掘されていない、途方もない量の知恵の宝蔵（ Weisheitsschätze）」が眠っているような感覚を覚える、と。しかし同時にシュタイナーは、この「古い知恵」に対して、現代に生きる私たちが理解できるような「新しい思考の形式（現代的な概念の形）」を開発していくことの絶対的な必要性を強調しています。その見事な実践のサンプルこそが、これまでに訳してきた、シュタイナーによる『十葉の書』をめぐるあの壮大な講義内容（点と空間の瞑想、構成要素の図式化など）に他ならないのです。

■ルドルフ・シュタイナー
『ゴルゴタの秘跡の認識への礎石
― 宇宙的・人間的メタモルフォーゼ』（GA175）
第七講　ベルリン、1917年3月20日
「誤りと真理」

私は本日、私たちの議論を進めるにあたり、一種の歴史的な考察を挟み込みたいと考えています。それは、この考察を単なる歴史的考察として行うため、つまり歴史から何かを引き出すためというよりはむしろ、私たちがこれから行おうとする考察を通じて、現代の精神的背景、私たちを直接取り巻いている精神的背景における様々な事柄が、身近に感じられるようになるかもしれないからです。

1775年、リヨンで非常に奇妙な本が出版されました。この本は極めて早く、すでに1782年にはドイツの精神生活における特定のサークルにも受け入れられ、その影響は一般に考えられているよりもはるかに大きいものでした。しかし、その影響は何よりも、19世紀の精神発展の主要な推進力となったまさにそのものによって、多かれ少なかれ押し戻されざるを得なかったという性質のものでした。この本は、最近の時代から現代に至るまでに一体何が起こったのかを、精神科学（人智学）の観点から方向づけようとする人々にとって、最高に興味深いものです。私が言っているのは、サン＝マルタンの著書『誤りと真理について』のことです。

今日、誰かがこの本を原語、あるいは「ヴァンズベックの使者」マティアス・クラウディウスによる美しい序文付きのドイツ語訳で手にとったとしても、現代人にとっては根本的に極めて理解しがたいものです。いや、マティアス・クラウディウス自身が告白しているように、18世紀末の当時の人々にとってさえ、すでに少々理解しがたいものでした。彼は、先ほども言った非常に美しく書かれた序文の中でこう述べています。「ほとんどの人はこの本を理解できないだろう。実のところ、私にも理解できない。しかし、その内容は私の心に深く染み入ったため、最も広い範囲の人々に受け入れられるべきだと思う」と。

特に、今日の学校教育や一般的な教養を通じて取り入れるような物理学的、化学的、あるいはその他の世界観（もちろん、これらの分野において少しの学識も持たないままにですが）を出発点とする人は、この本の内容からは何ひとつ得ることができないでしょう。また、いわゆる「政治」という言葉に触れないために、あえて現代の「時代観」と呼びますが、その時代観を普通の新聞や、その新聞の周辺にあって現代の教養を映し出している雑誌などから得ているような人も、この本からは何ひとつ得られないでしょう。

私が、先週の木曜日と土曜日の2回にわたる公開講演を終えたばかりのまさに今日、この本に結びつけて皆さんにお話しするのには、いくつかの理由があります。これら2回の講演で私は、人間の本質と構成、そして人間の魂と身体の結びつきについてお話ししました。それは、今日すでに得られながらも未だ活用されていない自然科学的知見が、正しい方法で眺められるようになったとき、人々がいつか語るであろうという意味においてです。自然科学的知見が正しく活用された暁には、表象生活（思考）、感情生活、意志生活と、人間の有機体（身体）との関係について、今日のように語られることはもはやなくなるだろう――これが、真に精神科学を認識している精神科学者の確信でなければなりません。したがって私は、これら2回の講演の内容によって、これから訪れるべきものの端緒が開かれたと考えています。それは、科学そのものではなく「科学者たち」がこのような事柄に対して示す大きな抵抗のせいで、外なる世界ではおそらくまだ長い時間がかかることでしょう。たとえ長い時間がかかるとしても、人間の魂と身体の関係は、これら2回の講演でスケッチされたような形で眺められる日が必ず来るのです。

さて、これら2回の講演で私は、まさに1917年という現在において、これらについて語ら「ねばならない」ように語りました。つまり、これまでに行われてきた自然科学的研究や、その他に関連する人間のあらゆる体験を考慮に入れた上で、語らねばならない方法で語ったということです。たとえば18世紀であれば、これらすべての事柄についてこのように語ることはできなかったでしょう。18世紀には、これらすべてがまったく異なる方法で語られていたはずです。人々は、私がこれまで何度も説明してきた次の事柄が持つ、どれほど

途方もない重要性であるかを、未だ十分に考慮していません。それは、19世紀の最初の3分の1が終わる頃、すなわち1830年代から40年代にかけて、精神的な観点から見て、ヨーロッパの人類発展に極めて強力な危機が生じたということです。私はこのことをしばしば、「その当時に唯物論の波が最高潮に達した」と言って特徴づけてきました。そして私はこれまで何度もこの点を説明し、次のようなありふれた決まり文句をよく耳にすることにも注意を促してきました。「現代は過渡期である」という言葉です。当然のことながら、あらゆる時代が過渡期であり、「現代は過渡期である」という発言は、どの時代にも当てはまるため、極めて安易なものです。しかし問題は、ある時代が過渡期であると確認することではなく、その移行が「何において成り立っているか」を突き止めることにあります。そうして初めて、人類の発展における深く決定的な転換点を表す、特定の時代の節目に到達することができるのです。そして、たとえ今日それが気づかれていないとしても、人類の発展におけるそのような深く決定的な移行期が、まさに先ほど示した時点（19世紀の30〜40年代）に存在していたのです。それゆえ、まさに人間を直接取り巻く謎について、18世紀に可能であった方法とはまったく異なる言葉、まったく異なる表現を用いて、いわばまったく別の側面から視点を定めなければならないのは当然のことなのです。

18世紀において、当時の自然科学的な観念にこれほど強烈に注意を向けながら、私たちがここで語っているのと非常に似た問いについて語った人物は、おそらくサン＝マルタンをおいて他にいないでしょう。しかし、サン＝マルタンはその語る内容のすべてにおいて、現在の私たちのように「新しい時代の黎明」の中に立っているのではなく、むしろ「古い時代の黄昏」の中に立っており、古い時代の黄昏とともに語っています。ですから、私がこのすぐ後にお話しする「ある主要な視点」を考慮に入れないならば、今日、サン＝マルタンをそもそも扱うべきかどうか、ヤコブ・ベーメによって刺激された思想がサン＝マルタンにおいてどのように独特な形をとったのかを、本当に自分の中に受け入れるべきかどうかは、ほとんどどうでもいいことのように思えるかもしれません。しかし、今日の考察の過程で言及する、それよりもはるかに別の、深く重要な視点が問題にならないのであれば、どうでもいいように思えるかもしれない、と私は言っているのです。

いくつか具体的な点を際立たせるために述べますと、サン＝マルタンは、人間がその世界観においていかなる誤りに陥り得るか、そして真理への道とは何であり得るかを示そうと試みる中で——何しろ彼の著書のタイトルは『誤りと真理について』なのですから——、18世紀にいたるまで特定のサークルの内部で極めて一般的であったいくつかの概念や思想を、考え得る限り最も的確な方法で扱いつつ、終始語っています。彼が語るのを聞けば、彼がそれらの概念や思想の扱いに完全に習熟しているのが分かります。

したがって、サン＝マルタンが人間と全宇宙、あるいは人間と道徳的生活との関係を捉えようとする際、彼は3つの主要な思想を扱っていることが分かります。これらはヤコブ・ベーメやパラケルススにおいても非常に大きな役割を果たしている3つの主要思想であり、当時、これらを通じて自然や人間を理解しようと試みられていたものです。すなわち、水銀、硫黄、塩です。当時、人々はこれら3つの要素——水銀、硫黄、塩——によって、外部の自然を理解し、人間を理解するための鍵を手に入れようとしました。

当時これらの思想が使われていたのと同じように、現代の人間が（現代の自然科学者が語るのと同じ意味において語ろうとすれば——そしてそうしなければなりません、さもなければ退歩してしまうからです）これらを扱うことは、もはやまったく不可能です。なぜなら、水銀、硫黄、塩という3つの言葉から、18世紀の人間が考えていたのと同じことを考えるのは、単純に不可能だからです。

当時、人々が水銀、硫黄、塩について語ることで提示していたのは「三位一体」でした。現代人が自然科学的な洞察をもって語る場合、私が試みたように人間を「代謝人間」「呼吸人間」「神経人間」に三分して初めて、この三位一体を再び正しく提示することができます。この三分されたものから、人間全体の組織が成り立っているように見えるからです。あらゆるものが、どうにかしてこれら3つの構成要素のいずれかに属しています。骨のように「そこには属さない」と思われるものがあったとしても、それは見かけ上のことにすぎません。これと同様に、18世紀の人間もまた、水銀、硫黄、塩についての包括的な概念を持っていれば、人間存在の全体を理解できると考えていたのです。

もちろん、現代の一般人や化学者が「塩」と言えば、テーブルの上にある白い粒のことや、化学者が実験室で取り扱う塩類のことを指します。「硫黄」と言えば、一般人はマッチを思い浮かべ、化学者はレトルト（蒸留器）や受器を使って硫黄の変容について行ったあらゆる実験を思い浮かべます。「水銀」と言えば、普通の水銀（水銀柱など）を思い浮かべる、といった具合です。

18世紀の人々は、そのようには考えませんでした。そして、18世紀のそのような人間が水銀、硫黄、塩について語ったとき、その魂の中に一体何が生きていたのかを、今日思い描くことさえすでに困難になっています。

サン＝マルタンも当時、彼なりの方法で次のような問いを立てていました。「人間の身体性を、その魂的なものの写し絵（模像）として観察するとき、私は人間をどのように構成すればよいだろうか」と。そして彼はこう言いました。「まず、人間の思考の道具、思考の器官に注目して人間を観察してみよう」――彼はこれについて少々異なる表現をしていますが、私たちが少し翻訳して現代の言葉に置き換えてあげなければ、説明が長くなりすぎてしまいます――「まず、人間の頭部の器官に注目して観察する。そこでの主要な事柄は何だろうか。何が考慮に値するだろうか。頭部において、今日で言うところの神経系において、本来働いている作用因子とは何だろうか」。そこで彼はこう言います。「それは塩である」と。

そして彼は「塩」によって、さしあたり白い粒のことも、化学者が言う塩のことも意味していません。むしろ、人間が表象するときに、人間の頭部で優先的に働いている「諸力の総和」を意味しているのです。そして、外部におけるあらゆる塩の作用は、本来人間の頭部で働いているのと同じ諸力の、単なる顕現、外部への現れにすぎないとみなすのです。

次に彼は問いかけます。「人間の胸部において、優先的に働いている要素は何だろうか」。先週の木曜日に私が提示した人間の構成に当てはめるなら、私たちは「呼吸人間において何が働いているか」と問い直すでしょう。サン＝マルタンはこう言います。「そこでは硫黄が働いている」と。ですから、胸の機能に関わるあらゆる事柄は、サン＝マルタンにおいては、硫黄、あるいは硫黄的なものに起源を持つ作用の支配下にあるということになります。

それから彼は問いかけます。「人間のそれ以外の残りの部分では、何が働いているだろうか」。今日なら私たちは「代謝人間において」と言うでしょう。彼は言います。「そこでは水銀が働いている」と。こうして、彼は彼なりの方法で、人間全体の構成要素を揃えたのです。

もっとも、彼の語り口や、時折これらを乱暴に混同してしまう様子からは、彼がこの思考体系全体の「黄昏」の中に立っていることが見て取れます。しかしその一方で、彼が黄昏の中に立ちながらも、当時まだ理解されており、今日では埋もれてしまった「巨万の真理の豊かさ」をなお受け継いでいることも分かります。彼は、水銀、硫黄、塩という3つの概念に与えられているものを自分なりに扱うことで、それを表現することができたのです。

そのため、彼はこの『誤りと真理について』という本の中で、非常に美しい論文を載せています――もちろん、現代の物理学者にとっては完全なナンセンスですが――それは、嵐や、稲妻、雷についての非常に美しい論文です。彼はそこで、一方では水銀、硫黄、塩を用いて人間の身体性について説明できることを示し、他方では、水銀、硫黄、塩の相互作用を用いることで、そのような大気現象を説明できることを示しています。ある時はこれらの要素が人間の内部で相互に作用し、またある時は外部の世界で相互に作用します。人間の内部において、これらはひょっとすると「思考」や「意志の衝動」として閃くものを生み出し、外部の世界においては、全く同じ要素がたとえば「稲妻と雷」を生み出すのです。

先ほども言いましたように、サン＝マルタンがそこで展開している内容は、18世紀の人間、つまり当時の思考様式の中にどっぷりと浸かっている人間であれば、なお完全に理解できるものです。現代の物理学者にとっては完全なナンセンス（荒唐無稽）です。しかし、まさに「稲妻と雷」に関して言えば、現代の物理学に

は、いわば、ある種の「矛盾」があるのです。というのも、現代の物理学は、稲妻と雷について何かを説明しようとする際、少しばかり安易な方法をとっているからです。そこでは、たとえば次のように教えなければなりません。「2つの雲があり、一方がプラス、他方がマイナスに帯電しているとき、その電気的な不均衡が放電されることで稲妻が発生し、それに伴って雷鳴が響くのだ」と。

も　し、少しばかりおませな学校の生徒がいて、その直前に先生が電気の実験をする際、器具が濡れていると電気がうまく伝わらないために、全ての湿気を丁寧に拭き取っている様子を見ていたとしたら、その子はこう言うかもしれません。「でも、先生、雲はあんなに湿っているのに、どうしてその中で電気が先生の言うように都合よく働くことができるのですか？」と。すると先生はこう言うでしょう。「お前は馬鹿な子だ、何も分かっていない！」と。――実際、現代の先生はそれ以外のことをほとんど言いようがないのです。

サン＝マルタンは、空気中の「塩的なもの」によって、「水銀的なもの」と「硫黄的なもの（」が、どのように特別な方法で結合され得るかを明らかにしようと試みています。そして、炭（木炭）と硝石と硫黄が、火薬の中で結合しているのと同様の方法で、塩の力を借りて「水銀的なもの」と「硫黄的なもの」が特別な化学変化を起こすことで、どのように爆発が生じるのかを示そうとしているのです。そして、この説明は当時の時代精神に則り、当時の「水銀的なもの、硫黄的なもの、塩的なもの」という概念を用いるならば、極めて機知に富んだ精妙なものとなっています。

さて、これ以上詳しく立ち入ることはできませんが、私たちはこの件をより歴史的な観点から眺めたいと思います。特にサン＝マルタンは、雷雨の後の空気のある種の澄んだ感覚などによって、まさに稲妻と「塩」との独特な関係が実証されることを、非常に美しく示しています。要するに、サン＝マルタンは彼なりの方法で、当時まさに台頭しつつあった唯物論と戦っていたのです。彼の背後には、彼という非常に重要な探求者を見出した「伝承された古い智慧」の土台がありました。

その際、サン＝マルタンは世界全体の解釈を目指し、私たちが今話したような諸要素を用いた説明を行った後、「地球の生成」の説明へと移行します。そこでの彼は、のちの世代の人々のように愚かではありません。のちの世代の人々は「カント・ラプラスの星雲説」を信じ込み、物理学的な概念によって世界の始まりに到達できると考えていますが、サン＝マルタンは地球の根源的な生成を説明しようとする際、ただちに「イマジネーション」へと救いを求めます。

地球の生成について語ろうとするその本の中には、驚くほど豊かなイマジネーションによる表象、すなわち「真のイマジネーション」が見出されます。これらは、彼の物理学的な観念と同様に、彼が生きた時代背景からのみ理解され得るものです。現代の私たちは、もはやこれらと全く同じイマジネーションを用いることはできませんが、それらは、彼がある特定の段階から、物事をイマジネーションによる認識によって把握しようとしていたことを示しています。

その後、この試みを終えた彼は、「歴史における人間の生活」を把握することへと移行します。そして彼は、歴史的な生活というものは、時折、精神世界からの「真の精神的衝動」が、この物理的次元（地上）の世界へと実際に介入してきたことによってのみ理解できるのだ、ということを証明しようと試みるのです。

それから彼は、この全体を人間のより深い本質へと適用し、聖書の伝説が「楽園における原罪（失楽園）」として描写しているものが、まさに彼のイマジネーションによる認識によれば、特定の事実に基いていること、すなわち、人間がいかにして「根源的な状態」から「現在の状態」へと移行したのかを示そうとします。彼は、自分の時代、ひいては歴史的な時代のあらゆる現象を、いわば「精神的生活の物質への転落」から把握しようと試みているのです。

――これらすべては、擁護されるべきものではなく、ただ描写されるべきものです。当然のことながら、私はサン＝マルタンの教えを、私たちの「精神科学（人智学）」の代わりに据えようとしているのではあり

ません。私はただ、当時サン＝マルタンがどのように歩みを進めたのかを示すために、歴史を語っているにすぎません。

これらすべての過程において、私たちは『誤りと真理について』という本の中で、章から章へと読み進めるたびに、常にひとつの奇妙な備考（注記）を目にすることになります。サン＝マルタンの本を手に取ると、彼が豊かな知識の泉から語っており、彼が提示しているものは、いわば彼の魂の中に生きている知識の、最も外側に伸びた蔓にすぎないということが見て取れます。しかし、彼はそのことを本のいくつかの場所でほのめかしてもいるのです。彼はそこで、およそ次のように述べています。

「もし私がこの箇所でさらに深く立ち入るならば、私は口にしてはならない真理を語らねばならなくなるだろう」と。ある箇所では、彼はこうさえ言っています。「もし私がここで最後まで語り尽くすならば、大半の人間にとっては、夜の最も深い闇の中に包まれておくのが最も望ましいような真理を、私は口にしなければならなくなるだろう」と。

真の精神科学者は、これらのあらゆる備考（注記）が何を意味しているのかを非常によく知っていますし、特定の章の特定の場所に、なぜこれらの備考が現れるのかも知っています。特定の事柄については、あらゆる前提条件（受け手の心の準備）が整っていない限り、語ることはできないのです。

精神科学（人智学）によって与えられる衝動が「道徳的な衝動」となったとき、そして、人間が精神科学を通じてある種の「高潔な精神」を自ら勝ち得たとき初めて、特定の問いについて語ることが可能になります。そうなって初めて、奇妙な科学的権威たち――フロイトとその一味を思い出すだけで十分ですが――が徘徊しているような現代とは異なる方法で、それらの問いについて語ることができるようになるのです。しかし、こうした高潔な精神への到達は、いずれ成し遂げられることでしょう。

サン＝マルタンはその著書の最後の3分の1において、特定の政治的事柄の議論へと移行します。現代の私たちにとって、まさにこの講義の場において、当時のサン＝マルタンの考え方を、現在の、そうですね、人類が「考えている」こととどのように結びつけるべきか、その手がかりをほのめかすことさえほとんど不可能です。なぜなら、それについて語ることは禁止されている（戦時下の検閲がある）からです。私に言えるのは、サン＝マルタンがこの本の最後の3分の1で見せている全般的な姿勢は、極めて独特なものであるということだけです。

この章を読むとき、現代の私たちは常に次のことを明確に意識しながら読まなければなりません。「この章は、本全体とともに1775年に出版された。フランス革命が起こったのは、この章が書かれた『後』のことである」と。私たちはこの章をフランス革命との関連において捉えなければなりません。まさにこの章を読むときは、本当に多くのことを「行間から」読み取らなければならないのです。しかしサン＝マルタンは、いわばオカルティスト（秘教探求者）としてのやり方で進めていきます。

サン＝マルタンのまさにこの章に存在している深い衝動を認識するための感受性を持たない人は、おそらく、サン＝マルタンがこの章に付した「序文（前置き）」によって、大いに心を安んじることになるでしょう。なぜなら、その中でサン＝マルタンはこう述べているからです。「私が誰かを批判しようとしているなどとは、決して誰にも思ってほしくない。地上の支配的な権力に何らかの形で関わっている人、何らかの形で政府の仕事に携わっている人は、私が自分を批判しているなどと決して思わないでほしい。私はあらゆる人、あらゆる人、あらゆる人の味方なのだから」と。

しかし、この言い訳が済んだ後、彼は本当に、ルソーの考察など子供騙しに見えるほどのことを語っているのです。まあ、これらの事柄についても、私はこれ以上語ることはできません。

要するに、私たちはこの人物の極めて決定的な重要性に直面しているのです。彼は自らの背後にひとつの学派（スクール）を持っており、その存在なしにはヘルダー、ゲーテ、シラー、そしてドイツ・ロマン主義を

考えることは到底できません。それはちょうど、ヤコブ・ベーメなしにはサン＝マルタンを考えることができないのと同じです。

それにもかかわらず、今日彼を読み、彼を自分に作用させてみるならば、まさに私が先ほど言った通りのことが言えます。私が先週の木曜日と土曜日に行い、そして次の木曜日にも再び行うように、サン＝マルタン的な形式を用いて一般の聴衆に語ることは、いささかの価値もないでしょう。それらの講演で私は、一方では精神科学の基礎に完全に合致し、他方では現代の最も微細な自然科学的発見にも完全に合致するような世界像を描き出そうと試みたのです。現代において私たちが考えねばならない方法、現代において物事を定式化するのが正当であるとされる方法の中に、サン＝マルタンの表象様式はもはや適合しないのです。

ある言語圏から別の言語圏へとやって来た人にとって、最初の言語圏の言葉ではなく、二番目の言語圏の言葉が適合するのと同じように、今日、サン＝マルタンの思想形態において物事を論じようとすることはナンセンスです。そしてそれがナンセンスである主な理由は、私たちの精神発展の歴史において、彼らと私たちとの間に「1842年」という、つまり19世紀の最初の3分の1の終わりに位置する、あの巨大な隔壁が存在しているからにほかなりません。

このことからお分かりの通り、人類の精神発展の歴史においては、ある特定の思考様式をもって古い時代の「黄昏」へと入っていくという可能性があります。しかし、サン＝マルタンの思想に深く入り込んだからといって、「そこからすでに全てが引き出され尽くした」という感覚を持つわけではありません。全くその逆であり、むしろ「そこには未だ発掘されていない英知の宝が途方もない量で眠っており、そこから極めて多くのものを引き出すことができる」という感覚を覚えるのです。それにもかかわらず、他方では、人類の精神発展の歩みにおいて、こうした古い考え方が終わりを告げ、別の考え方が始まることは必然なのです。こうした事実が横たわっています。なぜなら、その「別の考え方」にとって、外部の世界はまだ完全に始まったばかりであり、ようやく極端な唯物論の段階に到達したにすぎないからです。したがって、そこで一体何が起こったのかを本当に理解できるようになるのは、精神科学が今日ようやく刺激を与えようとしている事柄が、より大きな時間的スパンを経て経過した後のこと、つまりもっと大きな時代を展望できるようになってからのことです。もちろん、サン＝マルタンが18世紀末、それがまだ「黎明」の中にあった頃に語った内容は、今日それが受け取られるのとはまた異なる趣を持っていたはずです。

さて当時、この時代全体において、そもそも「あるもの」が終わりを迎えていました。ヤコブ・ベーメやパラケルスス、サン＝マルタンやその他の人々を支配していたような概念が、比較的新しい時代にいたるまで「黄昏」の中で保たれながらも、もはやそれ以上は扱えなくなったということだけが、終わりを迎えたのではありません。それだけでなく、感受性」の面においても、非常に重大な変化が起こっていたのです。

自然により多く向けられた人間の精神が、この「黄昏の現象」に関して、まさにサン＝マルタンにおいて最も明瞭に現れているとするならば、私たちが視線をこれとほぼ並行する時代の現象、すなわち「神智学の黄昏」、神智学的世界観の「斜陽」へと移すとき、全く同じ現象が少し異なる形で現れてきます。

確かに、サン＝マルタンも通常は神智学者と呼ばれますが、今私がサン＝マルタンを特徴づけるにあたって念頭に置いているのは、より自然科学的な方向を向いた神智学です。そして今から特徴づけようとしているのは、当時、それが支配的であった頃に「神智学」と呼ばれていた、より宗教的な神智学のことです。

この神智学はある特に厳密な形態をとって支配的であったため、そこでひとつの絶頂期を迎えました。それは――そうですね、南ドイツとさえうまく言えませんが――「シュヴァーベン地方（ヴュルテンベルク）」においてでした。この全般的な神智学の衰退期の中から、しかしこの黄昏の時代だからこそ特有の成熟に達した様々な人物の中で、ベンゲルとエティンガーという二人の姿が際立っています。彼らの周囲には、非常に多くの他の人々がいました。私によく知られている名前だけを挙げるなら、フリードリヒ・ダニエル・シューバルト、数学者のハーン、それからシュタインホーファー、さらにユング＝シュティリングに大きな影響を与え、ゲーテにも一定の影響を与え、ゲーテと個人的な知り合いでもあった校長のハルトマン、そしてヨハン・

ヤコブ・モーザーなどがいます。比較的つつましい地位にありながらも、緩やかなつながりすら持たないサークルを形成していた、これら多数の重要な精神たちは、皆エティンガーという星が輝いていた時代に生きていました。

エティンガーは、ほぼ18世紀の全体を生き抜いた人物です。1702年に生まれ、1782年にムルハルトで高位聖職者として亡くなりました。彼は極めて独特な人物であり、ある意味で、このサークル全体に起こった事柄が彼の中に凝縮されていたのです。

18世紀のこの神智学の名残りを形成したのが、他の大学でも教鞭を執りましたが、主にハイデルベルク大学で教えたリヒャルト・ローテでした。彼は、カール・アウグスト・オーベルレンが編集・出版した『フリードリヒ・クリストフ・エティンガーの神智学』という本に、非常に美しい序文を寄せています。

まさに余韻を体現し、このサークルの伝統を保持していたリヒャルト・ローテは、その序文の中で、自らの神智学的な確信に基づき、一方では私が先ほど名前を挙げた偉大な神智学者たちの神智学を今なお回顧しています。しかし他方では、彼がまさに神学者として眼前に据えている「生の秘密」に関しても、自分がひとつの黄昏の時代の「後の時代」に立っていることをまさに実感しているのが、その語り口から実によく伝わってきます。

リヒャルト・ローテはこの序文の中で、エティンガーについてそのように語っています。私はこの序文から、ある箇所を皆さんに朗読してご紹介したいと思います。この序文自体は1847年に書かれたものです。

これをお読みするのは、リヒャルト・ローテの中に――当時、彼はハイデルベルクにいました――エティンガーに思いを馳せ、エティンガーの中に「何よりも旧約および新約聖書を彼なりの方法で読もうと努力した人間」を見ていた人物が生きていたことを、皆さんに知っていただくためです。しかし、それは「神智学的な世界理解」をもって読むということでした。

リヒャルト・ローテはこの独特な聖書の読み方を振り返り、それを、すでに彼自身が学び、彼の周囲で通例となっていた読み方と比較しています（彼は1860年代に亡くなった、いわばひとつの余韻なのですから）。彼は、ベンゲル、エティンガー、シュタインホーファー、数学者で天文学者のハーン、そしてその他の人々が追い求めたものを、その（現代の）聖書の読み方と比較しているのです。

そこでリヒャルト・ローテは、極めて注目すべき言葉を述べています。

「さて、ベンゲルもその黙示録の探求をもって明確に属しているこの潮流の男たちの中で、エティンガーは最前列に立っている。当時の学派神学に満足できなかった彼は、キリスト教の真理に対する、より豊かで、より完全な、それゆえに言うまでもなく、より純粋な理解を渇望していた。正統派の神学は彼を満足させず、退屈なものに思えた。彼がそれ以上のものを求めたのは、その神学が彼の信仰に多くを要求しすぎたからではなく、彼の深い精神が、神学の提供し得るもの以上のものを必要としたからである。彼は、通俗的な神学の『超自然主義』に反発したのではない。むしろ、その神学が超自然的なものを『十分に実在的なもの』として捉えていないことに反発したのである。キリスト教信仰の世界における実在を、青白い抽象概念や単なる思想の幻影へと格下げしてしまう、神学にありがちな『主知主義』に、彼は魂の底から抵抗した。それゆえの、あらゆる『観念論）』に対する彼の燃えるような熱意であった……」

このような一文は奇妙に思えるかもしれませんが、理解しなければなりません。ドイツ人が「観念論」と言うとき、それは単なる「概念」の中に生きる体系を意味します。これに対してエティンガー、そして彼とともにあったローテが追い求めたのは、「真の精神生活（霊的生活）」でした。それは、歴史を前進させる「本物の精神（霊）」のことであり、ランケやその後の人々が、いわゆる『歴史的概念』として描写したような、あの青白い概念のことではありません。

概念というものが――実在的に語ろうとすれば言葉が見つかりませんが――あたかもそれ自体で歴史の中を歩み、物事を前進させることができるかのように現代人は語りますが、これらの人々は、抽象的で死んだものの代わりに「生きたもの」を据えようとしたのです。

「……それゆえの、あらゆる観念論に対する彼の燃えるような熱意であり、彼の（もちろん意図に反してではあったが）唯物論へと移りゆくほどの『実在論』であり、『マッシヴ（重厚・強固）な概念』に対する彼の精力的なこだわりであった。」

これらは、精神的なものを「本当に捉える」概念のことです。物事の根底に観念的な原像があるなどと語るのではなく、精神（霊）そのものを探求するような、マッシヴな思考であり概念のことです。

「彼の自然や自然科学への傾倒もまた、この彼の科学的な基本方向と密接に結びついている。観念論者が往々にして自然に対して抱きがちな、あの軽蔑的な過小評価は、彼には無縁であった。彼は自然の粗雑な物質性の背後に『実在的な存在』を予感しており、自然なしには、それが神的なものであれ被造物的なものであれ、どこにも真の存在、すなわち実在的な存在はあり得ないという確信に深く満たされていた。その際、驚くべきことであり、私たちがここで語っている潮流の歴史的正当性を新たに証明しているのは、自然の真の理解に対するこの渇望が、私たちのエティンガーにおいてだけでなく、それ以前および同時代のプロテスタントの神智学者たち、とりわけヤコブ・ベーメにおいて、宗教改革時代の本来の科学的傾向（当時の哲学的な試みに現れているような傾向）として、新たに突き抜けて現れている点である。エティンガーが憧れ求めたこのような実在論は、キリスト教の最も内なる本質に生まれながらに備わっているものである。」

――と、リヒャルト・ローテは言っています。

「（キリスト教が）これとは別の精神方向に植え付けられるとき、それは常に内容の希薄化を甘受せねばならず、まさにその最も固有な教義の点において最もそれが著しい。それゆえ、この実在論は、私たち全員が子供の頃から仕込まれてきたあの『観念論』――神的な事柄を実在的に考えすぎること、あるいは神の言葉を本来の意味通りに、また文字通りに受け取りすぎることを四六時中恐れて戦々恐々としている観念論――とは比較にならないほど、はるかに豊かな『キリスト教の奇跡の世界』を支えることができるのである。いや、このキリスト教的実在論は、まさにそのような奇跡の世界を、とりわけ『終末論』が展開する中で、まさに要求するのである。したがって、この実在論は、自分たちだけが理知的であると思い込んでいる者たちの、憐れみの混じった首振りに直面しても、その終末論的な希望において惑わされることがない。むしろ、被造物とその歴史を思想的に理解することが、世界発展の最終的な結果についての明確で判然とした思想なしに、一体どのようにして可能なのかが理解できないのである。なぜなら、創造の目的でありゴールであるそれ（最終結果）だけが、創造の概念と意味に光を当てることができるからである。この実在論は、最終的には、実在的な、具現化された、それゆえに本当に生きている『精神世界（霊世界）』という思想や、人間が現在の状態においてすら、その精神世界とすでに実在的に接触しているという思想からも、決して怯み退くことはない。読者は、これらすべてがエティンガーにいかに正確に当てはまっているかを、自ずと理解するであろう。」

ここには、自然の「概念」ではなく、「生きた精神世界（霊世界）」が追い求められていた時代への言及があります。実際、エティンガーは、精神世界との生きた接触を得るために、その生涯において自分に手の届く人類の知識の宝をすべて集めようと試みたのです。

しかし、この男の背後には何があったのでしょうか。彼はまだ、現代に生きる人間のような存在ではありませんでした。現代の人間には、何よりもまず、真の知識（知恵）を成立させるために「現代の自然科学が、精神科学によっていかに修正されねばならないか」を示すという課題があります。

これに対してエティンガーが追い求めたのは、また別のことでした。彼は、聖書、すなわち「書物」、とりわけ新約聖書を理解するために、生きた精神世界をいかに獲得するかを示そうとしたのです。このことについて、リヒャルト・ローテはやはり非常に美しく語っています。

「しかし、この（エティンガーの）姿勢を理解するためには、聖書に対する彼の『立場』、というよりもむしろ彼の**『心の調律（気分・マインドセット）』**を格別に考慮に入れねばならない。それは、聖書に対する正しい理解、すなわち『完全で十全な、それゆえに真に純粋な理解』が未だ欠けており、とりわけ教会による聖書解釈においてはそれが未だ与えられていない、という彼の生々しい問題意識である。
私がここでエティンガーについて言わんとしていることは、私自身がもう30年以上にわたり、聖書、とりわけ新約聖書、そしてその中でも何よりも『救世主（キリスト）の言葉』や『パウロの書簡』に対して抱いてきた経験を語ることで、最も明確にできるかもしれない。」

――と、リヒャルト・ローテは語ります。

「私たちが（既存の）注釈書を携えて聖書にアプローチするとき、聖書が私に与える印象とは、その『圧倒的な豊かさ（無尽蔵さ）』に対する、日増しに強くなる生々しい意識である。それは、聖書の中に波打っている、確かに決して汲み尽くすことのできない『感情の海（ベンゲルが聖書の輝きと呼んだもの）』についてだけでなく、その言葉の中に沈められている『思想の内容』に関しても同様である。
私は、長きにわたる数世紀を通じて実証されてきたものとして、教会から私の手に委ねられた『鍵』を持って聖書の前に立っている。私はその鍵が『全く合わない』とまでは言わないが、それが『正しい鍵である』とはなおさら言えない。それはかろうじて（錠を）開けはするが、それは私が錠に『無理な力』を加えることによってのみ可能になるのだ。
私たちの伝統的な聖書解釈は、私に聖書を理解させはするが、私にそれを『完全かつ純粋に』理解させるには至らない。その思想の全般的な内容はよく引き出してくれるものの、それらの思想が、なぜ聖書の中で『そのような独特な形態』をとって現れているのか、その理由を説明してはくれないのである。解釈がなされた後であっても、テキストの上には未だ『薄衣』がかかったままであるかのように私には感じられる。
この薄衣は、聖書の言葉の傍らに『不合理な残滓』として留まり続ける。もし解釈者がその仕事を徹底的にやり遂げたというのなら、この残滓のせいで、聖書の著者たちや、彼らがその言葉を引用している当事者たちは、非常に不名誉な立場に置かれることになる。
実際、主（キリスト）とその使徒たちが、解釈者たちが彼らに語らせている『まさにその通りのことだけ』を言おうとしていたのだとしたら、彼らは極めて不器用で、ぎこちなく、もっと正確に言えば、極めて奇妙な表現をしたことになり、彼らの言葉を聴き、読む人々に対して、全くもって不必要に理解を困難にしたことになる。この場合、私たちの膨大な聖書解釈文学のライブラリーは、キリストや使徒たちに対する厳重な告発状となってしまう。これほど比類なく重要な事柄について、これほど比類なく重要な目的のために語りながら、彼らがいかに明瞭でなく、いかに端的に、清らかな舌で語らなかったかという告発である。
しかし、この告発が彼らには当たらないことを、一体誰が感じずにいられようか。聖書の正しい読者は、その語り口こそが『まさにその通りに正しいのだ』という、完全に疑いの余地のない印象を受け取る。私たちの聖書解釈が、その内容に深く踏み込む前に、聖書の思想の表現から『野生のブドウの蔓』のようにまずは切り落とさねばならないと考える修辞や比喩は、決して無意味な飾りなどではない。
聖書解釈者たちが長年慣れ親しんできた、聖書の言葉はあまりに古く手垢がついているからといって、翻訳する前に『まずはその埃を払う』というやり方は、結局のところ、数千年来、永遠の若さという不滅の春の輝きの中で聖書を輝かせてきた、あの『真似のできない美しい輝き（産毛のような融和）』を、最初に拭き取ってしまうことに等しいのである。
聖書解釈の大家たちは好きなように冷笑するがよい。それでも事実は変わらない。彼らのテキストの『行間』には、彼らがどれほどの技術を尽くしても読むことのできない『何か』が書かれているのだ。しかし、神によって啓示された真理の、私たち全員に一般に認められている思想が、他のあらゆる描写とは決定的に異なる特徴をもって『まさに聖書の中にのみ』現れているという、あの全く独特な表現を理解するためには、まさに何よりもまず、その行間を読めなければならないのである。

私たちの解釈者たちは、聖書という絵画の手前に立つ『前景の人物たち』だけを私たちに解説し、その背景にある『遙か彼方の不思議な形をした山並み』や『輝かしい深青色の雲の広がる空』を無視している。しかし、まさにこの背景からこそ、前景の人物たちに対して、彼らを『変容）』させる、ある種全く唯一無二の『魔術的な光』が投げかけられているのであり、その変容こそが、私たちにとって彼らの本来の『謎』なのである。

聖書が語るその方法の『語られざる前提』として根底にある、独特な『根本思想』や『根本直観』が、私たちには欠けている。しかしそれらが欠けているということは、聖書の思想の個々の要素を有機的に結びつけている『絆』、すなわち本来の『魂』、聖書の思想圏の個々の要素の『内的なつながり』が欠けていることにほかならない。

そうであれば、私たちの聖書の中にある、まさにそれゆえに常に解釈者たちの『難問（十字架＝cruces interpretum）』であり続ける無数の事柄について、私たちが正確な理解に到達できないのも不思議ではない。テキストの細部が、そのすべての小さな特徴にいたるまで、いかに理由づけられているかを完全に認めるような理解に、私たちが至れないのも当然なのである。

これほど多くの箇所について、気の遠くなるような昔から互いに争い続け、未だに決着のつかない『解釈者たちの諸説の山』が存在していることも、何の不思議もない。なぜなら、それらの解釈はおそらく『すべて間違っている』からである。すべてが不正確であり、すべてがただ大体、大雑把に意味を言い当てているにすぎないからである。

私たちは、神と世界に関する『私たち自身の基本概念のアルファベット』を携えて聖書のテキストの前に立ち、それが自明のことであり他にはあり得ないかのように、善意の思い込みをしてしまう。聖書の著者たちが個々の事柄を考え、書く背後に、沈黙の前提として背景に据え、すべてを通して輝かせているものが、自分たちの基本概念と同じものであると思い込んでしまう。

しかし、それは残念ながら『妄想』であり、歴史がとっくに私たちをそこから目覚めさせているべき種類のものなのである。私たちの鍵は合わない。『正しい鍵』は紛失してしまったのだ。そして、私たちが再びその鍵を自らの手に取り戻すまでは、私たちの聖書解釈が軌道に乗る（実を結ぶ）ことは決してないだろう。

聖書そのものの中で明示的に語られているのではなく、単に前提とされているにすぎない『聖書の基本概念の体系』が、私たちには欠けている。それは、どうあがいても私たちの学校の体系とは異なるものなのだ。したがって、私たちがその前提なしに聖書解釈を続ける限り、聖書は私たちにとって『固く閉ざされた書物』であり続けねばならない。

私たちが唯一可能なものと思い込みがちな、自分たちに馴染み深いものとは『異なる基本概念』を携えて、私たちは聖書の中へと入っていかねばならない。それらの概念が一体どのようなものであり、どこに探されるべきものであろうとも、聖書の持つ自然な豊かさの中に響く『旋律の響き全体』からして、少なくとも次のひとつのことだけは疑い得ない。すなわち、それらの概念は、より実在論的で、『マッシヴ（重厚・強固）な概念』でなければならない、ということである。

私はここで、単に私個人の経験を報告したにすぎない。この経験を、それに馴染みのない人々に押し付けるつもりは毛頭ないが、私は確信を持ってこう信じることができる。エティンガーなら私の言うことを理解し、まさに自分も同じ状況であったと証言してくれるだろう、と。

しかし、私の同時代人の中にも、私に対する他のあらゆる批判はさておき、この点においては私に同意してくれるであろう人々がいると確信している。多くの名前を挙げる代わりに、私はただ一人、テュービンゲン大学の傑出したドクター・ベック（ヨハン・トビアス・ベック）の名前を挙げておこう。」

エティンガーが聖書の理解に到達しようとしたまさにその方法とは、彼が――サン＝マルタンと全く同様に「古い時代の黄昏」に生きていたわけですが――、この黄昏の時代にいまだ生きていた概念を自らのために活性化させ、精神世界（霊世界）との生きた結びつきの中に入ろうとすることでした。なぜなら、そうして初めて、聖書の真実の言語が自分に対して開かれるであろうと期待していたからです。

というのも、彼の確固たる前提として、「単なる抽象的な理性の概念だけでは、聖書の、とりわけ新約聖書の最も重要な部分を読み飛ばしてしまう」ということ、そして「新約聖書の真の意味に近づくことができるのは、この新約聖書が精神世界そのものの直接的な直観から紡ぎ出されたものであると理解できたときだ

けである」という確信があったからです。そこでは、いかなる学問的な解釈も注釈も必要ありません。何よりもまず、この新約聖書を「読む」ことができる能力が必要とされるのです。

この目的のために、彼は『神聖哲学』を追い求めました。それは、彼のあとに現れたような（近代的な）哲学のモデルに倣ったものではなく、人間が精神世界とともに生きるときに、本当に体験できる事柄が記されているような哲学のことです。

現代の私たちが、霊的事実を自然科学的に解明しようとする際、もはやサン＝マルタンの感覚で語ることができないのと全く同様に、今日私たちが福音書について語る際も、エティンガーの感覚で、ましてやベンゲルの感覚で語ることはできません。

ベンゲルが手がけた新約聖書の版（校訂本）は、今なお実り豊かなものであり続けるでしょう。しかし、ベンゲルが特に重きを置いていた事柄、すなわち「黙示録の探求」に対しては、現代人はさしあたり何ひとつ得ることができないでしょう。エティンガー自身は黙示録の探求からは距離を置いていましたが、彼より年長の先輩であるベンゲルは、黙示録の探求に非常に深く没頭していました。

そしてベンゲルはその黙示録の探求において、特に「数秘術的な算出」に多大な価値を置いていました。彼はそのようにして、歴史の諸周期を正確に計算し尽くしたのです。彼は、ある一つの数（年号）を特に重要なものとみなしていました。

彼がこの数（年号）を格別に重要視していたという事実だけで、もちろん現代的な思考をする人々（ここで私は、当然ながら「現代的な思考をする人々」という言葉に皮肉のクォーテーションマークをつけますが）にとっては、ベンゲルを単なる混乱した男、妄想家、あるいは狂人であるとみなすには十分すぎる理由になります。なぜなら彼の計算によれば、「1836年」という年が、人類の発展において特に重要な年になるはずだったからです。

彼は壮大な計算を行いました。彼は18世紀の前半に生きていたわけですから、この1836年という年からは、いまだ丸々一世紀も隔てられていたことになります。彼は1836年という転換点を計算し尽くしたのですが、もちろん彼なりの方法で、歴史の経過を外面的な出来事として思い描いてしまいました。

しかし、もしそれらの事柄を正しく眺め、現代の知識人（理性主義者）のような浅薄な賢さに惑わされることなく、物事の奥深くへと入り込んでいくならば、この善良なベンゲルは**「わずか6年しか間違っていなかった」**ということが分かります。この誤りは、ローマ建国の年の設定を誤って導入してしまったことに起因しており、その（計算の）ズレは簡単に証明することができます。

彼がその計算によって本当に意味していたのは、まさに「1842年」、すなわち私たちが「唯物論の危機」として指摘しなければならないあの年のことだったのです。エティンガーの師であるベンゲルが意味していたのは、歴史におけるこの「深い決定的な大転換」でした。

ただ、彼は「マッシヴ（重厚・強固）な概念」を渇望するあまりに行き過ぎてしまい、それらをあまりにも物質的に考えすぎてしまったために、外なる歴史の経過を、あたかもそこで「最後の審判」のような特別な何かが目に見える形で起こるかのように思い描いてしまったのです。彼はそのように想像しました。しかしそれは、「古い智慧にとっての最後の審判」にすぎなかったのです！

このように私たちは、私たちからそれほど遠く隔てられていない時代に、一つの「神智学の時代」が沈んでいくのを目にすることになります。そして今日、誰かが歴史や哲学を書くとしても、もしベンゲルやエティンガーの名前を挙げることすらあるならば、せいぜい、通常は何の意味もなさない数行の解説を彼らに割くくらいが関の山です。

それにもかかわらず、これらの人々は計り知れないほど深い影響を及ぼしました。もし今日、誰かがゲーテの『ファウスト』第二部の意味を問い、多くの注釈家たちが見出しているような浅薄な意味で満足しているのだとしたら、次のようなファウストの言葉に、ただただ驚かざるを得ないでしょう。

「いつでもくだらぬおもちゃにへばりつき、欲張った手で宝を掘り起こし、ミミズが見つかったと言っては喜んでいるような奴の頭から、よくも全ての希望が消え失せないものだ」

この『ファウスト』第二部には、途方もない量のオカルト（秘教）的な英知と、オカルト的な事実の描写が、まさに真に詩的な姿に表現されて閉じ込められています。もし、私が今皆さんに二つの主要な現象（サン＝マルタンとシュヴァーベンの神智学）として特徴づけたような世界が先行していなかったならば、これらすべて（ファウスト第二部のような作品）は到底生まれ得なかったでしょう。

現代の人間は、比較的いまだそれほど遠くない過去の時代において、人々が精神世界についてどれほど多くのことをなお知っていたか、そして、本当にここ最近のわずか数十年の間に、どれほど多くの知識が失われてしまったかについて、全く想像すらできていません。

とはいえ、この事実に一度しっかりと目を向けることは、極めて重要なことです。なぜなら、私たちが今日、精神科学（人智学）から提供できるものによって、人々はまさに「福音書を正しく読むこと」を学び始めるようになるからです。福音書を「読み直す」ということに関しては、まだ本当にその第一歩が踏み出されたにすぎないという事実があるのです。

エティンガーのケースもまた、極めて独特です。エティンガーの著作の中には、何度も引用されながらも、そのたびに理解されていない一つの文章があります。しかし洞察力のある人なら、この一文があるというだけで「このエティンガーこそ、人類最大の精神の一人である」と言うに十分な文章です。それは次のような言葉です。

「物質は、神の道の終わりである（Die Materie ist das Ende der Wege Gottes）。」

物質について、精神科学者（人智学探求者）も知り得る事柄にこれほど合致する定義を与えることは、途方もなく発達した魂においてのみ不可能です。神・精神的な創造の諸力がどのように働き、濃縮されて、たとえば人間のような物質的な形態をつくり出すのかを理解できる能力があって初めて、この言葉は可能になります。人間の形態とは、諸力の途方もない濃縮の「終わり（結果）」をその形で表現しているものだからです。

私の二作目の神秘劇（『魂の目覚め』）の冒頭で、カペジウスとベネディクトゥスの間で展開される、マクロコスモス（大宇宙）と人間との関係についての対話、そしてそこでカペジウスが何に苦悩しているのかを読まれるなら、現代の精神科学のニュアンスにおいて、これらの事柄を私たちの言葉に置き換えてどのように表現できるか、その概念を掴むことができるでしょう。エティンガーは彼なりの感覚において、この重大な言葉を口にすることができたのです。この言葉は、その中身を（精神科学によって）再発見して初めて理解できるものです。すなわち「物質は、神の道の終わりを表現している」と。

しかし、やはり彼の場合も同様です。私たちはもはや彼の言葉で語ることはできません。それはサン＝マルタンの言葉で語ることができないのと全く同じです。もし今日それらの言葉を語る者がいるとすれば、その人は、現代ではもはや理解され得なくなったものを「保存」することへの偏愛を持っているに違いありません。

しかし、諸表象がこのような変容を遂げただけではありません。感情の面でも、途方もない変容が起こったのです。

私たちの現代の、典型的な人間を思い浮かべてみてください。現代のそうした人間の、実に見事な「模範的一大標本」を思い浮かべ、その人物がサン＝マルタンの『誤りと真理について』を開き、そこで偶然次のような一文を見つけたとしたら、一体どんな顔をするべきか考えてみてください。

「人間は、自分の外なる肉体的な身体性の原理（根源）を知ることから守られてきた。なぜなら、もし人間が自分の身体性の原理を知ってしまったなら、羞恥心のあまり、衣服を脱いだ人間を直視することなど決してできなくなるだろうからである。」

――舞台の上で「裸体文化」を切望するような時代にあっては――まさに現代人類の模範的標本たちがそれをしているわけですが――、このような文章からは当然、何ひとつ得ることができないでしょう。考えてもみてください。世界を把握した偉大な哲学者であるサン＝マルタンが登場し、「人間の形態を眺めるとき、本来なら赤面すということこそが、より高い次元の羞恥心に属しているのだ」と説明しているのです。それにもかかわらず、サン＝マルタンにとっては、これは「絶対的に理解可能な事柄」だったのです。絶対的に理解可能な事柄だったのです！

お分かりのように、私が本日まず指摘したかった第一の点は、「そこには、極めて重大でありながらも埋もれてしまった何かがある」ということです。しかし第二に、私が特に注意を促したかったのは、「そこでは、私たちがもはや話すことのできない言語（思考様式）で語られている」ということです。私たちは「異なる方法」で語らねばなりません。今日、この言語で語るための思考の枠組みそのものが、すでに失われてしまっているのです。

しかし、エティンガーの場合もサン＝マルタンの場合も、それらの事柄が「決して最後まで考え尽くされているわけではない」ということが分かります。それらは「さらに先へと考え進めること」ができるのです。それらの思想についてさらに語り合うことは可能ですが、それは現代の唯物論的な人間相手では不可能です。

私はさらに一歩進めてこう言いたいと思います。私たちが今日、世界の謎について問いかけるとき、それらの古い思想について語り合う必要すらそもそもありません。なぜなら私たちは、古い概念によってではなく、現代の概念によって自分自身を把握せねばならないからです。だからこそ、この人智学の場においては、精神科学的なあらゆる営みを、まさに「現代の概念」と結びつけることに、これほど大きな価値が置かれているのです。

これは奇妙な現象です。私たちは、これらの古い概念へと二度と逆戻りしないことに途方もない価値を置くことができますが、それらの概念は過去において完成したわけではありません。それらの概念の側が、「それらを用いて、いまだ途方もない多くのことを考え進めることができるのだ」ということを、自ら示しているのです。

現代人は、これらの古い概念が、本来どれほど人間の全般的な意識と深く結びついていたかについて、全く想像すらできていません。なぜなら、現代人は「人間は昔からずっと、今と同じように考えていたのだ」という、おかしな思い込みに従って生きているからです。

私が先ほど言った現代の「模範的一大標本」は、このように考えます。「さて、食卓の塩入れに入っているあの白い粒々、あの白い粉のこと、それを私は塩と呼ぶのだ」と。この標本的現代人は、塩が言語によって異なる名前（ソルト、ザルツなど）を持つことは知っていますが、人々がその言葉で意味してきたものは、常に現代の自分が理解しているのと同じもの（塩化ナトリウム）であったはずだと当然のように思い込んでいます。しかし、それはまったく真実ではありません。

17世紀や18世紀、さらにはその後も長い間、農民であれ、どれほど教育のない人間であれ、「塩」と口にするときには、はるかに包括的な表象を持っていました。むしろ彼らは、サン＝マルタンが凝縮させたよう

な表象を持っており、そのような唯物論的な表象ではなく、「塩」と言ったときに精神的（霊的）な生活と結びつく何かを持っていたのです。当時の言葉は、今日のように物質的なものではなく、目の前にある個々の物質的なだけの対象を扱っていたのではありません。

ここで、福音書の中でキリストが弟子たちに「あなたがたは地の塩である」と言っている箇所を読んでみてください。もしこの言葉が、現代の言葉の感覚で「あなたがたは地の塩である」と言われるなら、それはキリストが語った意味とは似て非なるものになります。なぜなら人々は、「塩」という言葉を聞いた瞬間に、現代人がその言葉に対して抱く感覚、すなわち現代的な魂の構成を無意識に働かせてしまうからです。どれほど言葉の意味を広く解釈しようとも、それでは何の役にも立ちません。

現代人に対して、当時「塩」という言葉に込められていたのと同じニュアンスをもった感情を呼び起こすためには、そこには「塩」とは書かれておらず、別の何かが書かれているのだと翻訳してあげなければならないほどなのです。そして、非常に多くの歴史的文献、何よりも聖書に対して、まさにこの点において現代の物質的な感覚を当てはめるという重大な罪が犯されてきました。

ですから、エティンガーが言葉の背後にある「価値（言葉の持つ本当の重み）」や、言葉の正しいニュアンス（感じ方）を突き止めるために、果てしない歴史的研究を行おうとしたのも決して理解できないことではありません。もちろん、現代においてエティンガーのような頭脳は「狂人」とみなされます。なぜなら彼は自分の実験室に閉じこもり、数週間どころか数ヶ月もの間、錬金術的な実験を繰り返し、カバラの書物を研究したからです。それもひとえに、ある文章の言葉を本来どのように理解すべきかを突き止めるためでした。彼のあらゆる努力は、聖書の文章の「言葉そのもの」へと向けられていたのです。

さて、一方の視点（私たちは黎明にいるがゆえに、当時の黄昏の時代とは異なる方法で語らねばならないという点）から出発しつつ、同時にもう一つのより深い視点からも出発するために、私は本日ここでこれらの事柄について語ってきたのです。

ここで私は、もう一度次の奇妙な事実に立ち返りたいと思います。現代という時代が持つ背景――ここから精神科学（人智学）も発展していかねばならないわけですが――に対して、ベンゲル、エティンガー、サン＝マルタンといった当時の人々の表象様式に深く入り込むことは、一見すると「どうでもいいこと」のように思えるかもしれません。なぜなら、現代の教養層に向けて語る場合、私たちは「代謝組織の身体（代謝人間）」「呼吸組織の身体（呼吸人間）」「神経系の身体（神経人間）」について語らねばならず、「水銀の身体」「硫黄の身体」「塩の身体」について語ることはできないからです。パラケルススの時代、ヤコブ・ベーメの時代、サン＝マルタンやエティンガーの時代には、それらを研究する人々にとって理解可能であったこれらの概念は、今日ではもはや理解できないからです。

それにもかかわらず、これらの事柄を扱うことは決して無価値ではありません。たとえ現代の教養に対して、これらの概念を用いて語る可能性がもはや万に一つも残されていないとしても、決して無価値ではないのです。いや、私はさらに皆さんに同意しましょう。水銀、硫黄、塩といったこれらの古い概念を、今日の自然科学的な思考の中にそのまま投げ込むことは、むしろ「軽率」でさえあります。私はそれを不賢明であると思いますし、決して良いことではありません。自分の時代の要請を理解している人間なら、一部のいわゆる秘密結社のように、古い紋章を身に付けることに血眼になって、これらの古い概念を今さら復元させようなどとは思い及ばないはずです。

それにもかかわらず、サン＝マルタンやエティンガー、あるいはさらに古い時代のパラケルススやヤコブ・ベーメにおいて、「地上ではいまだ最後まで語り尽くされることなく途絶えてしまった、しかし今日ではもはや話されなくなったあの言語」を身に付けることには、途方もなく大きな霊的な意味があるのです。

なぜでしょうか？一体なぜでしょうか？現代の生きている人間はそんな言葉で話さないのですから、私たちはそのような言語を忘れてしまってもいいはずです。せいぜい、一つの歴史的現象として、「いかにしてこ

のような歴史的エポックが完結せぬまま終わってしまったのか」「なぜ、さらに先へと進むことができたはずの何かが、進める余力を残しながらも停止してしまったのか」という歴史的観察を行うくらいで十分なはずです。一体なぜ、何がその背後にあるのでしょうか？もし、私たちが学ぶべきすべての事柄を、これらの古い概念なしでも学べるのだとしたら、誰とも話の通じない古い言葉を身に付ける必要など、本来どこにもないはずです。

しかしここに、「計り知れないほど重大なある秘密」が姿を現します。

「生きている人間たち」は、もはやこれらの概念を語りませんし、語るべきでもなく、語る必要もありません。しかし、だからこそ、これらの概念という言語は、「死者たち（死の門をくぐり抜けていった人々）」にとって、それだけいっそう重要なものとなるのです。

もし人間が、死者たちと何らかの形で意思を通じ合わせる必要、あるいは精神世界（霊界）の特定の霊たちと通信する必要があるならば、「かつて地上の物理的次元においては終わりを迎えてしまった、あの『語られざる言語（古い概念）』を自分の中に身に付けることが、ある意味で絶対に不可欠である」ということに気づくようになります。

まさに、死の門をくぐり抜けていった人々（死者たち）の間において、これらの概念の中に生きている霊的リアリティが、死後、徐々に目覚めて生き生きとしたものとなり、彼らが求める「親しみ深い馴染みの言語」となっていくのです。

私たちが、当時においてそれらの概念がどのように考えられ、感じられ、捉えられ、思い描かれていたかという通りに、それらの古い概念の中へと自らを深く没入させればさせるほど、私たちは死の門をくぐり抜けた死者たちと、それだけいっそう豊かに意思を通じ合わせることに成功するようになります。私たちは彼らを、より深く理解できるようになるのです。

そうして、ここに奇妙で注目すべき秘密が明らかになります。それは、「ある特定の思考形態（概念の枠組み）は、この地球上に生きるものの、ある一定の限界点に達すると、それ以上は地球上で発展させられなくなるが、その後、死と新しい誕生との間の生命（あの世の生活）へと入っていった死者たちの間で、さらに先へと発展させられていく」という秘密です。

もちろん、現代の学校教育から得られるような、単なる化学物質としての「硫黄」や「水銀（メルクリウスは単なる水銀ではありませんが）」や「塩」の概念から、何か霊的な恩恵が得られると思ってはなりません。そのような物質的な概念だけを持っていても、死者たちの言語において彼らと結びつくためには何ひとつ役立ちません。

しかし、これらの概念を、かつてパラケルススやヤコブ・ベーメが持っていたように、とりわけ、いわばある種の「過剰な豊穣さ」をもってそれらを持っていたサン＝マルタン、ベンゲル、エティンガーのように受け取るなら、これによって「この世（物質界）」と「あの世（霊界）」との間に、一つの確固たる架け橋が架けられることに気づくでしょう。

この地上の人々は、ベンゲルの1836年の計算をどれほど冷笑しても構いません――それらの計算は当然、外なる物理的な生活にとっては、手に取れるような実用的価値を何ひとつ持ちません。しかし、「死と新しい誕生との間に立っている人々（あの世の死者たち）」にとっては、これらの計算こそが、まさに極めて大きな、意味深い真実味を持っているのです。なぜならあの世においては、ベンゲルが計算しようと試み、わずか6年しか間違っていなかった（1842年の唯物論の危機という）あのような歴史の「決定的な節目」が、魂にとって深く決定的な意味を持っているからです。

お分かりのように、この物理的次元にある世界と、精神（霊）の世界とは、単に抽象的な理論によってそのギャップをまたげるような形で結びついているのではありません。それらは、「極めて具体的な方法」で結びついているのです。

この地上において、いわば唯物論の台頭によってその意味を失ってしまったものは、それ自体が精神世界へと上昇していき、そこで死者たちとともに生き続けます。そして、地上に残された生きている人間たちの間では、それがまた別の新しい自然科学的な思考へと置き換えられねばならないのです。

――このことについて、次回、さらに詳しくお話ししましょう。（第七講 終了）